

かさおか

発行所

天理教笠岡大教会

かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)

電話 66-1311
FAX 66-1314



品治分教会

大正14年1月25日 設立
昭和35年10月26日 移転建築
平成9年10月26日 神殿建築
平成10年12月6日 奉告祭

教祖百四十年祭 笠岡大教会活動方針

つながろう、おやさまのお心に。
つなげよう、信仰の喜びを。

活動
目標

ひながたを学び、そのお心を実践しよう。

実践
項目

毎日、喜び・感謝を声に出そう



立教188年
7月号

笠岡支部 第26回総会

開催
婦人会

婦人会笠岡支部(上原愛美支部長)

は、6月22日に第26回総会を開催し、大人602人、子供88人、合計690人が参加しました。

「ひながたをたどり 陽気ぐらしの台となりましょう」という成人目標のもと、

教祖140年祭に向かって

育つ努力、育てる丹精に徹しよう

・元なる思召を伝え広めよう

・老いも若きもおたすけの喜びを

味わおう

を活動方針として会活動を進めてきました。そして今回は、支部長交代という節目の総会でもありました。

▼総会当日の様子と支部長あいさつ

当日は天気の良い心配をよそに晴天に恵まれ、午前10時、上原愛美支部長の手に合わせて、親神様・教祖・



婦人会本部の祝辞を
代読される支部長



大教会祭典同様につとめられたおつとめ

祖霊様を礼拝し、その後3交代でおつとめを勤めました。式典では、大教会長様、前会長様にご臨席いただき、今川直子・金浦委員部長の開会の辞、岡崎豊子常任委員による3年間の会務報

告が行われました。支部長からは、婦人会本部の祝辞の代読とともに、心一つにおつとめを勤められたことへの喜びの言葉が述べられました。そして

・教祖のひながたに照らし合わせて

素直に教えを実行すること

・徳分を活かして低くあたたい台

として揺るぎない信念をもつこと

・残り7か月の年祭活動をどんなこ

とも勇んで笑顔に変えて歩ませて

いただく

と呼びかけられました。さらに行事を開催するには多くの方のお心寄せがなくては出来ず、またそれを忘れてはならないと、総会開催にあたり各部・各

会また多方面にわたりご尽力いただいた方々に感謝を述べられました。更に第107回総会での真柱様の「この道が、末代かけて道を通る人を育て導き丹精することがどうしても必要」とのお言葉を胸に

・自らが育つ努力を重ねること

・この素晴らしい道の教えに自信と誇りを持ち、その態度で家庭や教会の人々に信仰の喜びを伝えること

・この素晴らしい道の教えに自信と誇りを持ち、その態度で家庭や教会の人々に信仰の喜びを伝えること



承継の決意を述べられる支部長

▼前支部長あいさつ

・教祖の思召に心を合わせることを志として、これからの婦人会のあり方を求めたいこと
・時代に流されず、たすけあい・諭し合いの道を通して心を治めていく努力を重ねていきたいこと
そして最後に、明治44年に発足以来114年の歴史を紡いできた笠岡婦人会を、守り導き、お育てくださった歴代支部長、前支部長へ感謝の意を述べられ、今後の婦人会活動のうえに、明るい希望をもち、励まし合いたすけあいの婦人会をつくっていきましょう、と結ばれました。

続いて前支部長は、会員の皆様に35年にわたる婦人会活動のお礼を申され

ました。そして私たちの人生の大きな目的は陽気ぐらし世界であり、いつかそれが整うように今歩んでいることに自信と誇りをもって、教祖の差し伸べてくださる日々の手を離さないように一人ひとりが自分のできる人だすけの歩みを続けていただきたい、と述べられ、本年4月の婦人会総会での真柱様のお言葉「道は目的地まで続いているからこそ道としての役割をはたす」を引用されて、この教えの道の一役を担う私たちだと誇りと自信をもって、活き活きと自らを輝かせて、ともに歩む仲間を増やしながら、あたたかな道の台として通っていききたい、新しい支部



35年間の謝辞を述べられる前支部長

▼大教会長様祝辞
引き続き大教会長様は、婦人会員の手により心一つに明るく陽気なおつとめを勤められたこととお喜びになられ、この度の総会は支部長交代総会であることから、前支部長には35年間、笠岡の芯をおつとめくださったことへの感謝を、会員の皆様へは新しい支部長に心を寄せて、会員一人ひとりが教祖の心に近づけるよう、明るく陽気な

長を芯に、しっかり手を取り合って、今よりも明るく賑やかな会活動を進めていっていただきたい、とあいさつされました。



支部長交替についての思いを述べられる大教会長様

心に一步でも近づかせていただいて、その心でつとめる婦人会活動にしていたいただきたい、と祝辞を述べられました。

▼誓いのことば 閉会

続いて会員を代表して山野なつ常任委員が「親神様から生み育ての徳分をお与えいただく私たち婦人会員は、次の代へと信仰をつないでいけるよう、常に温かく・やさしい親心で見守りくださる教祖のお心を忘れることなく、低い心・つなぎの心に徹し、この道を歩んでくださる方を一人でも増やして、教祖に喜んでいただけるよう、揺るぎない心で、にをいがけ・おたすけの実動を、また、新しい支部長様のお心にもしっかりと添わせていただき、教祖140年祭に向かって少しでも成人した姿をご覧いただけるよう、ともどもに歩ませてくださいたい」と、誓いのことばを述べました。

婦人会歌斉唱後、浅野はるえ・ひろ



感謝を込めて花束贈呈



誓いのことばを述べる山野委員

さと委員部長による閉会の辞で式典は終了しました。閉会後には、前支部長への感謝を込めたサプライズ動画が上映され、新支部長より花束が贈られました。

▼午後の部

昼食には、弁当と各ブロックが準備した模擬店(豚バラ・ぶっかけうどん・



揚げタコ・アイスクリーム・ミニ大福・ジュース・お菓子)を大いに楽しみ、講堂では、ダンスや歌、演奏などの多彩なアトラクションや福引きが行われ、



会場は笑顔でいっぱいになりました。(内容：女子青年のダンス、前委員長による瀬戸の花嫁熱唱、高屋分教会の箏曲・鼓笛、島根分教会ちびっ子た



ちのバナナ体操、青年会のダンス、ひまわり会のバンド演奏、前支部長から新支部長へのバトンリレーなど最後に、武内正美常任委員が「二手一つに

なれば、自分一人では出せない力を与えていただける。また自分一人では味わうことのできない喜びを味わわせていただける。」と、真柱様のお言葉を



引用し、年祭まで残り219日間を仕上げる歩みをみんなで歩ませていただこうと、終わりのあいさつを締めくくられました。記念品として、一般・会員へ



ポーチを、各委員部へは着物ハンガーを配布、総会は無事閉会いたしました。総会開催にあたり、厳しい暑さのなか、会場の設営や放送関係、調餞のう



えにご尽力くださった先生方、また駐車場係をしてくださった青年会の皆さまへ、感謝とともに心より御礼申し上げます。(記録係 吉岡 八恵)





ちば定めから150年 「ひのきしん団参」に 16人参加 青年会

6月28日に、青年会は詰所のひのきしんに行かせていただきました。
16人の参加者と共に勇んで詰所内の清掃や布団干し等させて頂きました！

後半は基本方針勉強会でした。本会の委員さんをお呼びし、10月25日青年会総会にむけて想いを共有する時間となりました。

150年前にちばが定められたこの日、「ちばに伏せ込み、をやの息をかけて頂こう。」を体現できたありがたい時間となりました。

(委員長 瀬藤 大喜)



六月月次祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さい

親神天理王命の御前に 会長上原明勇 慎んで申し上げます

親神様の親心溢れる御守護により 結構に恙なくお連れ通り頂いております事は誠に有難く勿体ない極みでございます 夏の訪れを感じさせる蒸し暑さの中 私共は日々朝夕に御礼申し上げつつ一条の御用の上に努め励ませて頂いております

その中にも今日の吉日は六月の月次祭を執り行う日柄でございますので只今からおつとめ奉仕人一同 喜び感謝の心を一つに睦び合い明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめさせて頂きます 御前には梅雨の最中にも関わらず今日の目を樂しみに寄り集いました道の子供たちが 相共にお歌を唱和し 日頃の御高恩に改めて御礼申し上げる状をご覧下さいまして 親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さて年祭活動締めくくりの年も早や半年が過ぎようとしております 笠岡に繋がるお互いは 「つながろう、おやさまのお心に。つながよう、信仰の喜びを。」の活動方針と 「ひながたを学び、そのお心を実践しよう。」の目標のもと 教祖にご安心頂き お喜び頂けるよう成人の歩みを進めさせて頂いております その中にも様々なふしをお見せ頂き 更なる成人をお促し下されることは誠に有難くその親心にお応えできるよう 最後までしっかりと歩み切らせて頂く所存でございます

何卒親神様には 親を慕い親に凭れ 親にお喜び頂きたい一心でたすけ一条に邁進する皆の誠真実の心をお受取り下さいまして 万たすけの上に尚も自由の御守護を賜り お望み下さる陽気ぐらしの世の状に一日も早く立て替わりますようお願い申し上げます

末の弟のまなざし

8

▼明治7年の暮れか、8年の正月頃

さて、寄り道の寄り道から抜け出して高安部内・東龍分教会の教会史『蔭徳』について記す。

244ページに注2として笠岡分教会史の引用がある。

『天理教笠岡分教会史』（昭和7・

8 笠岡分教会は昭和15年に大教会になつてゐる）に、安藤駒吉の名が出てくる。「丁度明治13年の正月（後にいふ旧長様注 上原佐助氏夫人）30歳の時である。佐助様（注 東大教会初代会長）がいつも理髪に行かれる床駒の前に立たれた。（床駒は安藤駒吉氏 後高安大教会の役員となつた）そして、そのとき次のような対話が交わされた。

佐助様 駒はん、そこに祀つてはるのは稲荷さんかい？

床駒 あれだっか、あれは世界一の神

さんだ。お話一条でどんな病気も助かる。結構な神さんだす。

佐助様 フフーン。・・・（暫くして）お

まはんとこの家内いつやや子生

んだんや？ おつきなお腹して居つたのに、今見りやちつそうなつてゐるが・・・

床駒 家内だっか？ 家内はよんべ産

んましたんや。この神さんはな

あ、おびや一条、自由用自在、のぼしなりと早めなりととおつしやる、ありがたい神さんだす。・・・

笠岡分教会史の引用の後で、東龍分教会史は次のように述べておられる。

東大教会初代会長にをいをかけたのは、床駒という床屋をやつていた安藤駒吉でアンドウという姓の人は、安堂鶴造の他はいない。しかも、当時は床屋もやつていた。

しかし、

1 鶴造が営業していた地は刑部村で、上原氏が行つたという床駒があつた生国魂神社の近く（現大阪市天王寺区生玉町）からはるかに隔たつてゐる。

2 鶴造の長男竹松が生まれたのは、ほぼ10か月前の明治12年3月なので、家内がゆうべ子供を産んだというのはおかしい。

3 小松、石川両氏との交流は、そ

れまでなかったし、その後もない。などから、安藤駒吉が安堂鶴造でないことはたしかである。

「天理教東大教会史」には、床駒は安堂駒吉という人の床屋で、その当時天恵五番周旋をしていた。教理を聴いた人は石塚松治郎（琵琶分教会初代会長）であつたとある。それが定説であろう。

私の見解を述べてみる。笠岡分教会

史は、笠岡の初代会長・上原さとの聞き書きに拠つてゐる。昭和7年の出版だから、大正の終わり、あるいは昭和の初め頃、役員の川合梅太郎氏が話を聴いて、文章化した。初代は17年91歳で亡くなつてゐるので昭和7年は80歳大正の終わりでは70歳頃という事と思う。かなり記憶はぼんやりとしていたと思われる。例えば、御津の初代小松駒吉氏の入信は明治15年であるが、分教会史では、明治13年に上原家の入信の時、神床を作る大工仕事をして下さつたようになってゐる。上原家の入信にしても、明治12年でもおかしくな

ど初代がそういうひとの相手をしてゐたやうで、佐助氏はいつも人力車であちこち移動してゐたやうである。明治

10年、河内在住の山田先生が長年の身上をおぢば帰りで教祖に助けて戴いた、そういう事も佐助氏の耳には入つてゐたのではないかと思う。天王寺から刑部村まで人力車でどのくらいかかるのだらうか。明治14年には上原家は人力車で一家揃つておぢばがえりしてゐる。何故人力車を外出に使つてゐたのかについては、佐助氏には脚氣の身上があつた。初代は小松駒吉氏とは親しかつたらしく、安藤駒吉という名も小松駒吉氏の名と記憶の中で重なつたのかもしれない。河内が故郷の高井直吉先生と親しかつたやうで、佐助氏は直吉先生の結婚式には当時既におぢばに居を移しておられた高井先生の元へ蛸を一匹届けに人力車で出向いてゐる。後に大坂三軒屋に居をうつされた河内出身の森田清蔵氏のもとへおふでさき おさしづ みかぐらうたなどを筆写のために通つてゐたこともあるが、佐助氏の信仰は河内の方々との親交の中で、明治10年頃から徐々に育まれてゐたのではないかと思われる。以下次号へ続く。

立教百八十八年 六月月次祭 祭典役割表

おととめ てをどり																	地 方			役割 区分		講 話	扈 者		祭 主	
胡 弓	三 味 線	琴	小 鼓	すり がね	太 鼓	拍 子 木	ち ゃ ん ぽ ん	笛	田 中 ま す み	前 奥 様	大 教 会 奥 様	上 原 繁 道 様	前 会 長 様	大 教 会 長 様	谷 内 秀 自	山 野 弘 実	谷 内 伸 自	森 本 忠 善	虫 明 立 生	吉 岡 誠 一 郎	大 教 会 長 様					
内 海 安 子	谷 内 美 知 子	上 原 順 子	岡 崎 真 一	三 代 温 生	岡 田 誠	吉 岡 誠 一 郎	吉 岡 誠 一 郎	佐 藤 真 孝	室 悦 子	横 山 小 智 榮	門 脇 加 津	森 本 忠 善	上 原 浩	門 脇 元 教	杉 原 善 朗	山 田 敏 教	田 中 隆 之					前 半	七月講話	指 図 方	上 原 志 郎	中 村 剛 史
高 木 孝 子	吉 岡 八 恵	岡 崎 豊 子	岡 崎 治 喜	佐 藤 真 孝	中 村 剛	内 海 史 郎	赤 木 素 志	岡 崎 真 一	山 野 な つ	中 村 初 美	武 内 正 美	虫 明 立 生	横 山 逸 郎	上 原 志 郎	岡 崎 治 喜	中 村 道 徳	佐 藤 道 孝	後 半	上 原 志 郎	上 原 志 郎	中 村 剛 史					
上 原 千 枝 子	田 中 つ か さ	三 島 照 美	上 原 繁 次	岡 田 誠	中 島 誠 治	高 木 昭 祥	谷 内 伸 自	中 村 剛 史	山 野 な つ	中 村 初 美	武 内 正 美	虫 明 立 生	横 山 逸 郎	上 原 志 郎	岡 崎 治 喜	中 村 道 徳	佐 藤 道 孝					後 半	上 原 志 郎	上 原 志 郎	中 村 剛 史	内 海 史 郎



◎本部月次祭登殿参列

立教188年6月26日登殿

東 芳 神
城 井 邊
横 佐 岡
山 藤 本
逸 真 善
郎 孝 一

大教会だより

◎第一〇〇六期修養科一期講師

自 立教 188 年 4 月 1 日
至 立教 188 年 6 月 27 日
ひろさと 浅野 明 教

◎第一〇〇六期修養科

* 教養掛(主任、副主任)

一ヶ月目① 今川 昌彦

金浦分教会長)

副
谷
本
章

(高丸分教会長)

二ヶ月目① 上原志郎

(大教会役員)

副 藤井正仁

(福富士分教会長)

上 備	上 吉 野	國 須	木 津 和	上 小 嶋	吉 舍	眞 府	瑞 雲	上 下
田	桑	小	丸	田	時	高	西	山
渕	本	西	山	中	宗	田	村	野
光	光	陽	正	一	一	一	靖	弘
明	則	司	人	矩	実	弘	彦	実

三ヶ月目 ④門脇元教

(大教会役員・

島根分教会長)

㊦猪原啓介

(門司港分教会長)

*修了者

東城横山章

葦陽塩出陵介

三郡貞清慎介

出雲川津仙田幸次

米府MAKENA PURITY



久しぶりに、山田洋次監督の「十五才」(学校Ⅳ)という映画を観た。山田監督といえば、「男はつらいよ」や「釣りバカ日誌」を大ヒットさせた日本を

代表する映画監督だ。日本アカデミー賞優秀作品賞にも輝いた作品で、以前私のところに相談にいられた親御さんや先生方に視聴を勧めたことのある作品だ。半年間学校に通うことが出来なくなつた主人公の少年が、屋久島の縄文杉を目指した旅を通して成長していく物語だ。少年が家出をした理由は、樹齢7千年とされる屋久島の縄文杉に触れてみたいと思つたからだ。映画の中で少年は、「小学校の国語の教科書に載つていたんです。屋久島の深い森の中に縄文杉と言つて7千年も生き続けている大きな杉の木があるんです。その幹に一度でいいから触つてみたい。そしたらきつと元気が出る。そんなふうに思つたんです。」と語つた。私も是非チャンスがあれば縄文杉に触つてみたい。ただ、私なら縄文杉の代わりに、おちばがえりを勧めたいな

と思ひながら、さらに映画の世界へ入つていった。

映画の中で山田監督は、2度にわたつて、主人公の少年と同じ「詩」を繰り返し朗読させた。少年が旅の途中で、自分と同じように部屋に閉じこもつて、10年以上にもなる青年と出会い、心が通じ合い、その青年から自作の「詩」をプレゼントされたものだ。この詩を通して、「すべての人にはそれぞれに社会の中で与えられている意味があり、それぞれに意味のあるスピードで歩み続けている。」という山田監督のメッセージを感じた。詩の中に出てくる「浪人」を「私」に置き換えて読んでみた。

草原のど真中の一本道をあてどなく浪人(私)が歩いている
ほとんどの奴(人)が馬に乗つても浪人(私)は歩いて草原を突っ切る

早く着くことなんか目的じゃないんだ

雲より遅くてじゅうぶんさ

この星が浪人(私)にくれるものを見落としたいくないんだ

葉っぱに残る朝露流れる雲

小鳥の小さなつぶやきを聞きのがしたくない

だから浪人(私)は立ち止まるそしてまた歩き始める

還暦を過ぎた今、この詩を繰り返し読んでみると、これからの自分自身の歩み方通り方にヒントを与えてくれているように感じる。与えられている意味を信じてしっかりと歩んでいきたい。教祖140年祭当日まで、あと200日となった。

映画「十五才」を是非ご覧になつてみてください。
(友)

試案 天理教笠岡大教会史

昭和四十六年末までの大教会史は「天理教笠岡大教会史第一巻」に収録されている。大教会史第二巻は、文章体でなく、年表風に綴つてみたいと思つている。此の件に関しては、主立った人達に意見を聞いて見たい。ここに掲載する年表そのものが試案なので、読んで下さりながら種々の意見を聞かせてくださ

れば、と思つている。教祖百年祭を終えた二年後頃、年間統計を毎年出版されていた部署から、今年、よふぼく数が、減少に転じたとの発表があつた。その後、コロナ禍があり、初席者数、授訓拝戴者数が急激に減少し、現在に至つている。これが増加に転じる事を期待して、年表作成を続けてはいるが、全教的大教会の行事も、同じ事の繰り返しで、文章化する事もないのではないかと、と思案する次第である。御勘案頂きたい。
(令和七年七月記す)

昭和四十七年以降の歴史を書き進めるに当たって昭和四十六年竣工した移転建築普請の概要を年表で記しておく。

昭和四十一年(立教百二十九年・1966年)

二月二十日 四代会長・上原郁雄から移転建築ふしん打ち出し
六月二十日・二十一日 ふしん講習会 講師…大教会世話人・本部員 榊井孝四郎先生、大教会長、老会長(三代会長・上原繁雄)、受講者…ふしん委員、ふしん実行委員
常任委員任命

第一回ふしん実行委員会

六月二十二日 第一回ふしん委員会 「一手ふしん」のスローガン決定
十二月五日 移転地買収契約成立 総面積 七八八二坪 支払い期日 昭和四二年三月三〇日 十二月十四日 小林州弘氏に神殿図面原案作成を依頼

昭和四十二年(立教百三十年・1967年)

一月九日 大教会年頭会議 移転地買収についてねりあい ふしん実行委員買収予定地視察

二月中 移転地買収についての一斉部内巡教

三月三十日 移転地購入 登記完了

三月三十一日 移転地及び建築建物について具体案をねりあう

五月二十五日 井上久雄氏に建築建物設計図原案を依頼

六月二日 移転地への参道工事着手 市有地を借用して井戸掘工事着手

六月二十日 井戸掘工事完了 水質良好 水量豊富

六月二十五日 原田一平氏に設計図案を依頼
九月十九日 参道工事完了

九月二十六日 各種設計図案を検討の上、匠建築設計事務所(原田一平氏作成)に絞って検討を重ねる事に決定

十月二十一日 第二回ふしん実行委員会開催 全部内教会へ設計図案を配布
検討依頼

十一月十四日 二代真柱様お出直し

昭和四十三年(立教百三十一年・1968年)

一月九日 大教会年頭会議 昭和四十六年が創立八十周年、二代会長五十年祭執行の年に当たるので、移転普請完成の年とする旨発表

二月二十一日・二十二日 教義講習会 上田民夫、前川正通両本部員先生講話
「別席者五千人達成」の打ち出し

五月二日 「別席者五千人達成」特別巡教始まる

六月十九日 三代真柱様移転地御視察

八月五日 移転地北側の山林七百坪追加買収

十月二十五日 真柱継承奉告祭

十一月二十一日 第三回ふしん実行委員会開催 ふしんお供袋を配布 毎月、身上かしのかりものの喜びの理を大教会に運ぶ事にする